



うえの エイ子 さん

1927年 湯堂生まれ  
1971年 水俣病患者と認定  
1973年 水俣病患者の療養施設「明水園」に勤務  
1999年 水俣病資料館「語り部」になる

現在、水俣市浜在住。

私は、水俣湾のすぐ南に位置する、湯堂という地域で生まれ育ちました。ここは半農半漁を営む集落で、私の家族もそうでした。私は結婚後も、主人と二人で、豊かな海だった水俣湾で漁をしながら生活をしていました。

1956年、水俣病が公式に確認され、伝染病・奇病と騒がれるようになりました。その年、漁師をしていた父が突然発病し、翌年、奇病として亡くなりました。

2年後の1958年、結婚して3年目にして子供を授かり、喜んでいたのもつかの間、夫が突然発病しました。漁に行き網を引き揚げていたら手が急に震えだし、5分とたたないうちに話す言葉が途切れ途切れになり、夜には話すことができない状態になってしまいました。症状はあっという間に進み、苦しみがきながら、発病からわずか13日で亡くなりました。

葬儀を終えた6日後、私は娘を早産しました。元気に生まれてきてくれたその姿を見て泣きました。しかし、娘は三か月経っても手足を突っ張ったまま、首もすわらずダラーっとしていました。おかしいと思って病院に行きましたが、きちんと診断もせず「小児麻痺」と言われました。

私の周りで相次ぐ奇病の発生に、周囲の人からは変な目で見られました。買い物するにも、差し出したお金を受け取ってもらえず、伝染病扱いされました。娘は、何も見えず聞こえずの状態です。母親の私のことを恨みもせず亡くなっていきました。解剖され軽くなった娘をおんぶして帰ったこと、当時周囲から受けた差別・偏見などの冷たさを思い出すと、今でも涙が止まりません。

話すことで、どこまでわかっていただけるか不安に思うこともあります。しかし、本当に「水俣病」という悲惨な公害は二度と起こしてはいけません。その思いから私は語り続けます。

私がお願いしたいことは、心と心のつながりを大事にしてほしいということ、そして、水俣病のことを学んで、未来に教訓として引き継いでいってもらうことです。